堺利彦のモリス評価

山田眞實

日本における社会主義運動の先駆者の一人である堺利彦（1870—1933）が幸徳秋水（1871—1911）達とともに社会主義運動の実践活動をはじめたのは明治30年代のことである。この頃から社会主義は大きな関心を集めはじめ日本社会主義史上の勃興期を迎えたのである[1]。しかし，当時の社会主義は今日の我々の考える社会主義とは大きく異り，社会主義に相通じるものをもったキリスト教的博愛主義や人道主義，自由主義，民主主義なども社会主義の中に包括され，その内容は多様であり雑多であった。幸徳や堺は社会主義を宣伝し，大衆のために闘う場としてジャーナリズムを利用したのであるが，当時のジャーナリズムとしては自由民権思想の系統に属する『自由新聞』，『報知新聞』，『民権新聞』等，また一般のものとしては『大阪朝日』，『国民新聞』，『二六新聞』，『萬朝報』[2]等があげられよう。また幸徳や堺は社会主義宣伝のため「平民社」をおこし，週刊『平民新聞』を発刊した。こうして日清戦争後わずか数年にして日本の社会主義は急速に勃興期を迎えることになったのであるが，その後，日露戦争前後より社会主義はその発展とともに強力な弾圧や様々な試練に直面する。とりわけ社会主義そのものも，キリスト教の流れをくむ人道主義的な社会主義と，科学的な，即ち唯物論的な社会主義に分裂してゆくのである。この小論においては，日本社会主義の勃興期に活躍した社会主義者の中から堺利彦をとりあげ，堺がWilliam Morris（1834-96）の社会主義思想を如何に捉え，評価したのかを考えてみたい。

堺のモリス評価の主な業績としては次の三つのものが考えられる。(1)『平

民新聞』における「社会主義の詩人ウヰリアム，モリス」等のモリスの社会主義思想に関する数篇の紹介記事及び *News from Nowhere* (1890) の抄訳。（明治36-37年)。(2)『生活と芸術』誌におけるモリスの *News from Nowhere* を模倣したユートピア小説「小剣が百卅五歳になった時」及び「渋六さん」，「井リアム，モリス」等の記事。（大正２年)。(3)『改造』誌における論文「芸術的社会主義者 ヰリアム・モリス」（大正９年)。以上の業績の中で，(1)と(3)は堺のモリス評価，即ちモリスの社会主義思想を如何に捉え，評価したかに関するものであり，(2)はモリスの社会主義思想あるいは *News from Nowhere* を参考にして堺自身が描いたユートピア小説及びそれに関連する記事である。今回は(1)と(3)を中心にして堺のモリス観を考え，(2)に関しては次の機会にゆずりたい。

堺利彦は明治３年福岡県の士族の三男として生れ，上京後，中村正直の創立した英学塾同人社，さらに共立学校（のちの開成中学）をへて，第一高等中学校に入学した。英語に堪能で友人と相計って『英学雑誌』を発行したが，月謝滞納のため除籍され福岡に帰る。明治22年，19歳の時，短編小説『悪魔』を『福岡日日新聞』に連載，同年大阪へ行き天王寺高等小学校の英語の教員となる。『大阪朝日新聞』関係の文学者達と交わり『水無瀬漫筆』，『当世品定』，『隠堺物語』等の小説を発表した。教員をやめいくつかの新聞の記者をつとめるかたわら『いろは』，『破れ羽織』等の多数の小説及び翻訳小説を発表した。明治32年，29歳の時『萬朝報』に入社「よろづ文学」欄を担当する。堺は萬朝報社で幸徳秋水，内村鑑三，圓城寺天山らと知りあい社会主義者としての道を歩み始めた。明治34年，日本で初めての社会主義政党である「社会民主党」が誕生した。創設者の一人である片山潜は，同年４月自らの編集する『労働世界』（第77号）に，「四月二十四日は，我邦労働者の永く記念すべき日なり。安部磯雄，木下尚江，幸徳伝次郎（秋水)，河上清，西川光次郎及片山潜の六社会主義者が組合本部に集り普通選挙及労

働者保護を実行せんとする目的を以って、社会民主党組織の第一回協議を開けり。其の発表も近きにあり」と書いている[3]。大杉栄が「当時の思想界ではキリスト教がいちばん進歩思想だったのだ」[4]と述べているように日本で最初の社会主義政党の発起人6名中5名までがキリスト教徒であった。イギリス労働党の母胎である「労働代表委員会」が生まれたのが1900年であるから，「社会民主党」はわずか1年おくれて誕生したわけである。堺は明治34年5月「社会民主党」結成と同時に入党しようとするが，わずか2時間後に結社禁止となったため果せなかった。しかし，この頃より堺は小説家，文学者としてよりも，社会主義者として生きてゆく決心を固めた。

明治36年，堺は，日露開戦をやむなく支持せざるをえなくなった『萬朝報』の方針に反対しあくまで非戦論を唱える幸徳，内村と共に萬朝報社を退社した。『萬朝報』の創刊者である黒岩涙香は同年10月11日付の『萬朝報』に「内村，幸徳，堺，三君の退社に就て」という一文を発表し三者の退社をおしんでいる[5]。退社後，堺は幸徳，石川三四郎，西川光次郎らと共に「平民社」をおこし週刊『平民新聞』を創刊した。この『平民新聞』は日本で初めての社会主義宣伝のための機関紙であり，堺らはこれを舞台にして激しい反戦運動をくり広げたのである。

堺はまた言文一致文章の普及に力を尽したが，彼の翻訳家としての数々の業績も注目に値する。堺はアメリカの社会主義作家である Edward Bellamy の *Looking Backward 2000–1887*（1888）の抄訳を『家庭雑誌』[6](明治36年)に，モリスの *News from Nowhere*（1890）の抄訳を明治37年1月から4月にかけて週刊『平民新聞』に連載した。幸徳と共訳のマルクスの『共産党宣言』を初めとして，彼はマルクス，エンゲルス，カウツキー，ハインドマン[7]の著書やトルストイ，ディケンズ，ルソー，ショーなどの著作を翻訳した。堺は日本の社会主義者としては初めて唯物論を唱え，マルクス主義の立場をとった先駆者であるといわれているが，彼の翻訳の業績をみる限り，必ずしもマルクス主義という狭い範ちゅうにとらわれることなく，社会主義に

反せぬ限り，キリスト教的，人道主義的，自由主義的なものも含めて，広い視野で良書を選び翻訳していることが分る。その量，質ともに，堺は翻訳家としても第一級の業績を残したといって過言ではない。

明治38年，弾圧により週刊『平民新聞』は終刊となり，後継紙としての『直言』が発刊されたが，これも4年後に廃刊のやむなきに至った。同39年堺は片山潜，西川光次郎らと共に社会主義政党「日本社会党」を結成する。翌40年1月，日刊『平民新聞』を発刊するが，これも弾圧のため3ケ月で廃刊する。この後堺は社会主義者として様々な弾圧に耐え，数度の入獄，大逆事件による幸徳の処刑といった試練をのりこえ，日本共産党の創立に参加，委員長となる（大正11年）。この後昭和8年，63歳で死去するまで，入出獄をくり返しつつ，社会主義の実践活動に身を投じた。こうして堺は幸徳と共に日本社会主義史上の偉大な先駆者として，輝かしい業績を残したのである。

明治31年12月に村井知至を初代会長として，キリスト教社会主義者達を中心に「社会主義研究会」が発足し，河上清，片山潜，安部磯雄，幸徳らが参加した。彼らはサン・シモン，マルクス，プルードン，モリス等の社会主義思想を研究したが，明治33年，安部磯雄の会長就任と共に「社会主義協会」と名称を改め，社会主義宣伝のための実践活動に力を入れることになった。翌34年には安部，片山，河上，西川，幸徳，木下尚江，以上6名で日本で最初の労働者政党である「社会民主党」を結党するが，ただちに解散を命じられた。この後も彼らの社会主義の実践活動は続けられたが，この啓蒙的な社会主義の実践活動に明確な進路を示したのが週刊『平民新聞』であった。『平民新聞』は「社会主義研究会」や「社会主義協会」の実践活動を土台として，真向から当時の日本政府と対決した。特に『平民新聞』は日露開戦をめぐって徹底した非戦論の立場を貫いたのである。

週刊『平民新聞』には幸徳，堺の他，石川，西川が加わり，安部，木下，村井，白柳秀湖，荒畑寒村，中里介山らが寄稿者として協力した。先に述べ

た如く，安部，石川，木下，村井などはいずれも敬虔なクリスチャンであった。

『平民新聞』の文章は高い格調をもち，内容も決して平易なものではなかった。また読者のほとんどはインテリ青年層に限られており，当時の労働者階級にはほとんど受け入れられていなかった。しかし，『平民新聞』創刊一周年を記念して，マルクスの『共産党宣言』を幸徳，堺の訳で掲載したのをはじめとして，欧米諸国の社会主義者達の思想を紹介し，インテリ青年層への社会主義思想の浸透に大きな業績を残した。明治37年5月頃より政府の社会主義運動弾圧は苛酷さを増し，翌38年1月29日，『平民新聞』は第64号をもって廃刊となった。マルクスの『新ライン新聞』(*Die Neue Rheinische Zeitung*) はドイツ三月革命の敗北の結果終刊を余儀なくされ，その全紙面は赤刷りとなったが，その例にならって堺らも『平民新聞』の終刊号を赤刷りとし，政府当局への激しい怒りの文章を掲げた。

昭和6年，堺は自らの平民社時代をふり返り『中央公論』に「平民社時代—初期社会主義者の運動と生活」[8] と題する長文の論文を書いている。第四章「平民新聞発行事情」の中で堺は『平民新聞』第1号を引用しつつ次のように語っている。「この事務所には粗末ながら腰掛テーブルを備えつけ，そこを『我々の休息所』とも『同志の倶楽部』ともする積りで，『多少の趣味』を持たせたいと考えた。．．．『秋水がマルクスとエンゲルスとの肖像を並べた大きな額と，ベーベルの肖像の小さな額を持ってきた。』その外，ウリアム・モリスの肖像を堺が持って来たれば，『秋水の細君が又その額を寄附してくれた』」この一文にも堺のモリスへの関心の深さがうかがわれる。また第7章「肖像と面影」では，「平民新聞には第一号に『進歩社会民主党首領ベベル』の肖像があり，第二号に『近世社会主義の祖師カルル・マルクス』，第三号に『仏国社会党首領ジャン・ジョーレ』第四号に『社会主義の詩人ウヰリアム・モリス』のがある。後になってからの，普通の書き方と稍や違って居る人名が，一種の興味を催すに足る。面の執筆は平福百

穂君[9]の厚意であったと記憶する。」と述べている。以上のように『平民新聞』発刊当初から堺のモリスへの関心は高かった。

明治24年渋江保による『英国文学史』に初めてモリスの名が紹介されて以来，『早稲田文学』第25号（明治25年10月15日），第26号（同年10月18日）における詩人としてのモリス紹介，徳富蘇峰主宰の『国民之友』第171号（明治25年11月），第197号（同26年7月），第330号（同30年1月），第331号（同30年1月）における社会主義者としてのモリス紹介等がみられる。いずれもモリスがまだ存命中であり，詩人として，社会主義者として活躍していた頃のことであった。しかしながら，いずれの紹介も「雑誌」という制約上，比較的簡単なものにとどまっていた。そして明治32年村井知至が主著『社会主義』を出版した（後に発禁となり同35年に再版）。村井は『社会主義』第6章において，John Ruskin (1819-1900) やモリスの考え方を正当に捉え，ラスキンのモリスへの影響をふまえつつ，両者の思想の共通点や違いについて的確に述べている[10]。村井の『社会主義』は日本におけるモリス紹介の歴史において最初の大きな業績と考えられよう。

堺は明治36年12月6日発行の週刊『平民新聞』第4号において「社会主義の詩人ウヰリアム・モリス」と題した記事をのせている[11]。この中で堺は村井の『社会主義』第6章の一部分を引用し，ラスキンのモリスへの影響，及びモリスの社会主義思想を簡単に紹介している。堺自身その記事の中で「以上は吾人の同志村井知至君が其著『社会主義』の中に記せし所を摘載せしもの也」[12]と述べているように，堺がモリスの社会主義思想を知るに至ったのは村井の『社会主義』を通してであったと考えられる。この記事はモリス没後7年，ラスキン没後わずか3年という早い時期に書かれたわけであるが，そこには当時の欧米における社会主義思想をいち早くとり入れ，日本の社会主義運動の中にくみ込んでいこうとする堺の強い情熱が感じられる。村井は『社会主義』の中で「ラスキンは寧ろ復古主義にしてモリスは革命主義なり」と述べているが，堺はこの村井のラスキン，モリス評価をうけつぎ，

特にモリスの革命主義的社会主義に注目した。こうして堺は明治37年1月3日発行の週刊『平民新聞』第8号より同年4月17日の第23号にわたってモリスの *News from Nowhere* の抄訳を「理想郷」と題して連載したのである。

堺は「理想郷」の連載にあたって「はしがき」の中で，まず「社会主義」を次のように定義づけている。「社会主義は，総ての生産機関を公有にして社会全体の福利の為に之を運用するという経済上の一定の考を持って居る。社会主義は又，人々互ひに相愛して私利の為に他人を辱わず，私慾の為に他人を傷つけぬと云う道徳上の一定の考を持って居る」。堺は社会主義の大原則を以上のように考えたが，更に「然し社会主義はドコまでも主義であって形では無い。決して或一定の形を理想にして，其鋳型に従って新社会を組織しようとする者では無い。道徳上にせよ，経済上にせよ，抽象的の考は一定して居るが具體的の鋳型は決して一定して居らぬ」と述べている。この堺の考え方は重要である。なぜならば，社会主義の大原則は一定しているが，社会主義者の描くユートピアは一人一人にとって異るものであると指摘しているからである。この社会主義の多様性を認めようとする寛大な精神は，明治30年代に活躍した多くの先駆的社会主義者達に共通のものであったと考えられる。また堺はモリスの *News from Nowhere* を抄訳する動機として，「然るに抽象的なる主義の説明は容易に多くの人の耳に入らぬ。そこで天才のある詩人文人が，其想像の馳するに任せて，将来に起るべき其主義の応用，拡充，発展の迹を考へて，敢て一個の鋳型を作り，之を以て具體的に人に示さんと試みた。之を其形の上より評すれば，固より一個の私見に基く空中の楼閣で，到底其真を尽すことは出来ぬ筈であるが，其代りには多くの趣味と多くの情緒とが其間に溢れて，おのづから人を化し人を導くの力がある」と述べている。多様な社会主義の存在を認める堺は，その一つの例としてモリスの社会主義をとり上げ，モリスの示す「具體的鋳型」即ち *News from Nowhere* においてモリスが描いたユートピアを紹介したのである。つ

まり堺は卓越した趣味と美意識をもつ詩人であり，美術工芸家であり，社会主義者でもあるモリスの好みと夢の結晶であるユートピアを日本の社会主義者達に，参考にすべき一つの「鋳型」として示そうとしたのである。

モリスはフェビアニズムを否定し，アナキスト達と対決しながら，最晩年まで戦闘的なマルクス主義者としての信念に基いて行動した。Thomas Carlyle やラスキンも資本主義批判を行ったが，モリスは単なる資本主義批判にはとどまらず，1880年代にはマルクス主義を信奉するようになり，社会主義の実践活動に入っていった。モリスは1883年，1887年の二回に亘り，『共産党宣言』や『資本論』を読み，克明なノートをとった。モリスは『資本論』を 'the Great Book' として講演，論文などに引用し，Belfort Bax との共著 *The Socialism: its Growth and Outcome* (1893) においてはその多くの部分を『資本論』第1巻の経済論の要約と解説にあてている。こうしてモリスはマルクス主義を信奉する社会主義実践家として大きな業績を残した。しかしながら一方で空想的社会主義者といわれる Robert Owen[13] を高く評価し，更にフランスの空想的社会主義者 Charles Fourier にも傾倒し，*The Socialism: its Growth and Outcome* においてフーリエの思想をくわしく論じている。またモリスは，終生ラスキンを偉大な師と仰ぎ，ラスキンの主著 *The Stones of Venice* (1851-3) の中の一章 "The Nature of Gothic" を自らのバイブルとしたが，晩年モリス自身がこの一章を Kelmscott Press 版として出版した際，その序文に自ら筆をとり次のように述べている。

> For the lesson which Ruskin here teaches us is that art is the expression of man's pleasure in labour; that it is possible for man to rejoice in his work, for, strange as it may seem to us to-day, there have been times when he did rejoice in it. . . .[14]

このようにモリスはラスキンの労働観を自らの社会主義思想の根幹の一つとした。以上のようにモリスは社会主義者としての基本的な信念としてはマルクス主義をとっていたが，カーライル，ラスキンを初めとして，オーエン，

フーリエ等を高く評価し，彼らの考え方から大きな影響を受けていた。このようにモリスはマルクス主義にこだわらず，さまざまな社会主義的思想から有益なものは積極的にとり入れたのである。堺はモリスの *News from Nowhere* について「些の束縛なき自由の生活を写して，殆んど無政府主義の理想に近づいて居る所が其特色である」[15] と述べているが，この堺の評価は，マルクス主義を信奉しながらも多様な社会主義の長所を寛大に認めてゆこうというモリスの精神を正しく捉えているといえよう。このモリスの態度は，明治30年代の，堺を含めた日本の社会主義者達に共通した態度でもあった。

モリスの *News from Nowhere* は夢物語の形式をとった32章からなるユートピア物語である。1888年にベラミーの *Looking Backward 2000-1887* が出版されたが，それを読んだモリスは *Commonweal* 紙上で激しくこの書を非難した[16]。そしてベラミーの *Looking Backward 2000-1887* への批判をこめて書きあげられたのが *News from Nowhere* であった．また *News from Nowhere* 執筆のもう一つの大きな目的には，当時のイギリスの資本主義社会への批判，告発があった。しかしながら 'an epoch of rest' という副題が示すように，そこに描かれている，社会主義革命が成功してすでに150年経た21世紀のユートピアは，「アルカディア」と名づけてもいいような美しい牧歌的な世界である。空を汚し，河を汚染する工場はすべて消滅し，美しい自然が果しなく広がるロンドンを舞台に，そこに住む人々は皆美しく，豊かな生活を営み，友人同志，恋人同志の心身のふれあいを楽しんでいる。厭わしい労役のためにのみ機械を補助的に使い，人々は商品として売るためではなく，自らの生活に必要なものだけを想像力を働かせ美意識にまかせて造り出している。つまり，この世界では '*all* work is now pleasurable'[16] であり，この「労働のよろこび」をすべての人が享受する。強制的な学校教育，議会，裁判所などはなく，国家すらも存在せず，政治も一さい消滅してしまっている。このモリスのユートピアは，まさしく堺のいう「無政府主義の理想」に近いものである。

「理想郷」（一）「発端」の抄訳の後に，堺はモリスの *News from Nowhere* とベラミーの *Looking Backward 2000-1887* を比較して，「(*News from Nowhere* の場合）夢にした所はルッキング，バックワードと同じであるが，ルッキング，バックワードは百年後，是れは二百年後を想像したものである。又前者は一八八七年に，後者は一八九二年に出版されたものであるから，いづれ後者は前者の影響を受けたに相違あるまい」[17] と述べている。堺が *Commonweal* (1889年6月29日号)[18] に掲載されたモリスの激しいベラミー批判を読んだかどうかは判断し難いが，ベラミーの *Looking Backward 2000-1887* がモリスの *News from Nowhere* の執筆のきっかけとなったことは明らかである。また堺はベラミーとモリスには「其思想に於て大分根本的に違った所があるらしく思われる」と述べているが，この指摘は重要である。ベラミーの描く世界は機械文明が極度に発達し，独占資本主義的，官僚主義的な国家社会主義の世界である。ベラミーの *Looking Backward 2000-1887* とモリスの *News from Nowhere* とを共に抄訳した堺であればこそ，この両者の根本的な相違を正当に判断しえたのであろう。

週刊『平民新聞』に連載された「理想郷」は大正9年4月15日に単行本として出版されたが，出版と同時に発禁となり，その後56ページ削除されて出版された。すでにふれたごとく，同年，堺は『改造』6月号に「芸術的社会主義者ヰリアム・モリス」という長文の論文を発表している。同じ号に柳宗悦の「朝鮮の友に贈る書」が掲載されているが，モリスの柳への影響を考える時，興味深いものがある。この8章よりなる堺の論文は，堺がモリスを総合的に評価し，日本の社会主義者達にモリスの思想を紹介しようとするものである。いわば堺のモリス観の結晶ともいえるものである。

「芸術的社会主義者ヰリアム・モリス」の「はしがき」において，堺はモリスの伝記として W. Mackail の *The Life of William Morris* を使い，参考本としては A. Clutton-Brock の *William Morris: His Work and Influence*

及び Jonn Spargo の *The Socialism of William Morris*, M. C. Gillington の *A Day with William Morris* 等の小冊子を参照にしたと述べている。

次にこの堺の論文において重要と思われる点を検討してゆきたい。第2章「幼年時代及び青年時代」で堺はモリスとラスキンの出会いを重視し，ラスキンのゴシック建築論や中世観が如何にモリスに大きな影響を与えたかを指摘している。堺はラスキンのゴシック建築観について次のように述べている。「ゴシックの建築では，総ての職人が自己を表現する機会を持ってゐたが，ルネサンス及び其後の建築では，職人は只だ建築師が命ずる儘の事をするのである。故にゴシックにはルネサンスの様な堂々たる所はないが到る処に自発的の生気がある。丁度それは人民の権利を承認した国家の様なものがある」この堺の指摘はラスキンの *The Stones of Venice* の中の一章 'The Nature of Gothic' の主旨をかなり正しく伝えている。更に堺はラスキンの考え方がモリスにどのような影響を与えたかについては，「此の説明（ラスキンのゴシック建築観）はモリスに取って実に福音であった。モリスは勿論，ルネサンスに大芸術家のある事を認めた。然し彼は亦ルネサンスの中に産業時代の害悪を認めた」と述べている。この堺のことばには，ラスキンのモリスへの影響と共にモリスの思想の根源が資本主義批判，商業主義批判にあったことが正しく指摘されている[19]。

また同論文の第3章「ロセチの影響」において，堺はモリスと D. G. Rossetti (1828-1882) の考え方の相違を説明している。まずロセッティについては「ロセチは人生を逃れて芸術に入ろうとした」と述べ，モリスについては「人生を芸術化しようとした」と指摘している。唯美主義の立場をとるロセッティと芸術の民衆化を目指すモリスとは考え方の相違や私生活上の問題[20]等により必ずしも終生良好な関係を保ち得たわけではないが，堺も指摘するように両者の根本的な相違は芸術そのものに対する考え方の違いであったと思われる。ロセッティは絵画を他の芸術から独立したものと考え，それを最も重んじた。一方モリスはあらゆる日常生活品を芸術化し，その作品の

中に造り手と使い手との緊密な関係を見い出そうとしたのである。更に堺はモリスの芸術観について「彼に取っては，芸術は一個の社会的業務であって，健全な社会に於いてでなくては其完美は期せられないのである」と述べているが，ここには芸術と社会とは決して切り離すことはできないというモリスの基本的な考え方が明らかにされている。

モリスは健全な社会として中世の社会を想定し，その健全な社会の具体的な象徴としてゴシック建築を評価したわけであるが，堺はモリスがゴシック芸術を最高の芸術として考えた理由として，「彼がゴシックの芸術を愛したのは，それが進んで建築に服従した点に在る」と指摘している。またルネサンス芸術に関するモリスの態度を「建築から独立したルネサンスの芸術に対しては，彼はどうしてもそれを愛することが出来なかった。ルネサンスの芸術には私慾があった。そしてそれがモリスには，近代の世界に於ける有ゆる私慾の徴候と見えた」と指摘している。モリスは天才と呼ばれる芸術家が人々の日常の生活からかけ離れた作品を次々にうみ出したルネサンス期を芸術の堕落のはじまりと考えたが，その原因として堺は「彼は芸術を熱愛しながら，芸術家（若しくば彼自身）を一種の超人と考へる事が出来なかった。彼は寧ろ自ら一個の職人として，自己の仕事を楽しむの余り，人の求めるより以上を与へる者だと考へてゐた」と述べている。モリスはある時代の芸術を評価するのに，その時代の絵画等の大作をもってするよりも，人々の使った日用品をもって評価しようとした。このモリスの芸術観の根本的な考え方を堺は正しく捉え，次のように述べている。「彼は芸術家であったばかりでなく，自分の好む通りに世の中を作り上げようとする実行家であった。即ち彼は其点に於いて，椅子の改善から始めて遂に全社会の改善に及ぼしたわけである」。このように，堺はモリスが社会主義者となったユニークな動機をかなり的確に理解していたと考えられる。

さらに，『改造』所収の同論文の第四章「モリス会社の設立」において堺はモリスがデザイナーになろうとした動機やモリス商会の設立の過程を述べ

ている。モリスは19世紀当時のイギリスの粗悪で悪趣味な美術工芸品及び日用品に対して激しい批判を行い，日用品の質の改革にのり出した。その端緒となったのが，自らの新居 Red House の建設（1859年）であった。自分の趣味に叶った家を欲しいと考えたモリスは建築家 Philip Webb 等の協力を得て，イギリスの住居史上画期的なものと評される堅牢で美しい家を Kent 州 Bexley Heath に建設した。モリスは Red House の室内装飾を担当したが，その時の経験を生かして，室内装飾会社を設立した。これが Morris, Marshall, Faulkner and Co. であった。堺はモリスの美術工芸家としての考え方について次のように述べている。「（モリスは）直ちに此の悪美術（19世紀当時の美術）の意義を看破した。彼は意覚上から此の悪美術を憎悪したのではなく，それを悪事の表現として道徳的な憎悪を感じたのであった」。この堺の指摘は注目に値する。なぜならば，モリスが当時の美術工芸品の改革を志したのは，単に日用品の粗悪さや趣味の悪さを是正しようとしたばかりでなく，日用品の醜悪さが当時のイギリス社会そのものを反映していると考えたからであった。モリスは，美しいゴシック建築が中世の世界を象徴しているように，いつの時代でも芸術がその時の社会を反映していると考えたが，モリスのこの考え方が，モリスを単なるデザイナーから社会主義者へと飛躍させる原因ともなっているのである。堺はこの点を正確に理解しているといえよう。更に堺はモリスが，「彼はラスキンと共に，初めて真に自己の芸術に於ける好悪について，科学的な理解を持った人である。哲学者は昔からよく芸術を談じたが，彼等は皆な芸術を人間の他の諸活動から孤立させていた。然るにラスキンとモリスとは寧ろ芸術と他の諸活動との関係，即ち全社会の心との関係を考へた」と述べている。即ち，堺は，芸術と社会とは切り離して考えることはできないものであるというラスキンやモリスの基本的な考え方の独自性を高く評価しているのである。

第六章「中世工芸の復活」及び第七章「社会主義者としての彼」において，堺はモリスが中世を理想の社会と考え，中世的理想社会を実現させるた

め社会主義運動を指導するに至った経緯と，モリスの社会主義者としての具体的な活動を紹介している。モリスは19世紀のイギリスの美術工芸が暗黒時代にあると考え，古来の秀れた様々な美術工芸法を復活させようと試みた。そして過去の技法の研究からモリスは「過去の芸術の勝れてゐたのは，決して少数の天才が現はれた為ではなく，普通の職人を正常に仕込んだ結果である」ということを学んだと堺はいう。またモリスは美しい日用品を創作し，人々の生活を豊かにしようと考えた。しかし，当時のイギリス社会ではこのモリスの考えは実現不可能であった。堺はこの点について「然し当時の社会状態は常に彼が善い作品を作る事を妨げた。此に於いて彼は芸術から政治に赴いた」と述べている。以上のように堺はモリスが社会主義者となった独自の動機を指摘し，「即ち芸術の改革に志したと同じ熱心を以て，今度は根本的に社会状態の改革に志した」と述べている。更に堺はモリスが社会主義運動に入るきっかけとなった東方問題に対するコミットメントから，その後の社会主義者としての具体的な活動を克明に紹介している。その中で特に重要と思われる点は，堺がモリスを科学的社会主義者として高く評価していることであろう。堺は，「彼は資本論の仏訳を読んで，ハインドマンやバックスやショウなどと議論をして，十分の智識を貯へてゐた。ハインドマンとの共著なる“A Summary of the Principle of Socialism”やバックスとの共著なる“Socialism, its Growth and Outcome”を見ればモリスの其の方面に於ける造詣が善く分る」と述べている。

堺のこの論文が書かれた1920年頃は，イギリスにおいてモリスは詩人として，美術工芸家として，あるいはケルムスコット・プレスの創設者としての側面ばかりが高く評価され，モリスの社会主義運動，あるいは科学的社会主義者としてのモリスの側面が軽視される傾向があった。この事実を考えると，堺がモリスを科学的社会主義者として評価したことは非常に重要なことであり，ある意味では本国におけるモリス評価を先取りしたものであったといっても過言ではない。幸徳秋水と共にマルクスの『共産党宣言』やエンゲ

ルスの『空想より科学へ』などを翻訳した堺の科学的社会主義者としての造詣の深さを考える時，堺のモリス評価はより一層の重みが感じられる。

『改造』所収の「芸術的社会主義者キリアム・モリス」において，モリスの社会主義運動の経緯を辿った堺は，第七章の最後で次のように記している。「或者をして云はしむれば，此の一章の記した所は，モリスが芸術家としての浪費，政治家としての失敗に過ぎないとするかもしれぬ。然し彼れの運動に依って英吉利の社会主義が彼や，ショウや，エルスの様な，芸術的社会主義者，文学的社会主義者を有する為にも如何に大いなる誇りを示しているか，又更に彼れの社会主義的著述が如何に広く全世界に影響を与えているかを思へば，殊にそれが遠く今日の日本にまで少からぬ影響を与へている事を思へば社会主義者としての彼れの価値と功労とは，洵に偉大なものである。又芸術家として見ても，彼が晩年に社会主義者となったが為に，特殊の光彩が発揮した大利益がある。若し『太平に吟咏する一閑人』で生涯を終ったなら，それこそ芸術家の浪費である」

以上が堺利彦のモリス評価であるが，重要であると考えられる点をいくつかあげてみる。

(1). モリスの *News from Nowhere* が *Commonweal* に連載されたのが1890年であり，単行本として出版されたのが1891年であるから，堺の週刊『平民新聞』における「理想郷」の抄訳は本国での出版から14年後，モリス没後わずか8年後のことであった。堺のそれまでの翻訳の業績としては，エミール・ゾラの『子孫繁栄の話』（明治34年），カール・カウツキーの『社会革命論第一章』（明治35年）（ノート稿），エドワード・ベラミーの『百年後の新社会』（明治35年）等があげられる。しかし自らの主宰する週刊『平民新聞』の第4号にモリス紹介の記事を書き，第8号から第23号に亘って「理想郷」を連載したということは，堺のモリスへの関心がきわめて高かったことを示している。同時にこのことは明治30年代の日本の初期社会主義

者達の欧米の思想移入への強い情熱を物語るものといえよう。

(2). モリスは自らマルクス主義者であると称し，実践活動を行った人であるが，彼の描くユートピア，*News from Nowhere* の世界はアナーキズムの世界に近いものである。そして堺はこの事実を理解していた。狭量なマルクス主義者であればモリスのユートピアを認めることはできないはずである。しかし堺は社会主義者の数だけユートピアは存在すると考え，社会主義者がそれぞれ自らの好みにあったユートピアを描くことに何の不思議もないと考えた。そして堺はモリスのユートピアを数あるユートピアの中の一つとして日本の社会主義者達に紹介する価値があると判断したのである。この社会主義の多様性を認めようとする堺の考え方は，当時の多くの社会主義者に共通のものでもあった。

(3). 堺はラスキンのモリスへの影響を指摘した上で，芸術と社会とは切り離して考えることはできないというモリスの考え方を評価している。モリスは芸術の堕落は社会の堕落だと考え，19世紀イギリスの芸術を堕落から救うには社会そのものを変革しなければならないと考えた。そしてその手段としてモリスは社会主義をとったのである。堺は，モリスが社会主義者となったこの極めてユニークな動機を正しく指摘している。

(4). 明治30年代の揺籃期を経て，日本の社会主義は徐々にマルクス主義を絶対的なイデオロギーとする傾向を帯びてくる。堺自身も日本で最初の科学的社会主義者であると称されたが，それでもなお大正9年に「芸術的社会主義者キリアム・モリス」という長文の論文を書き，モリスの価値を訴えている。ここには教条主義，セクト主義に捉われない堺自身の寛大な精神がうかがえる。そしてこの堺の態度は，マルクス主義を標榜しながらも，ラスキンやフーリエ，オーエン，クロポトキン等の影響をうけ，彼らの思想の長所は積極的に評価し，受け入れてゆこうとするモリス自身の態度に近似している。故にモリスが，日本における最初の翻訳者として，あるいはモリスの思想の紹介者として堺を得たといこうとは，当然のことでもあり，幸いなこと

であったといえよう。堺もモリスもともに科学的社会主義者であることを自認しながらも，その社会主義精神は寛大なものであった。彼らのこの態度は両者共文学者であり実作者であったということに起因しているのかもしれない。また両者は社会主義者として単なる理論家ではなく，自らの信じる社会主義実現のために激しい社会主義運動に身を投じた実践家であった。以上のように，モリスと多くの共通点をもつ堺であったが故に，堺はモリスの社会主義思想に魅力を感じ，またそれを深く理解しえたといえよう。

(5). 堺は「芸術的社会主義者キリアム・モリス」の冒頭に参考本としてマッケイルの *The Life of William Morris* をはじめ二，三の小冊子をあげているが，いずれもモリスの社会主義を正面にすえて徹底的に論じるといったものではない。特にマッケイルの伝記は，社会主義者としてのモリスの業績を軽視し，故意に矮小化しようとする傾向さえある。そしてマッケイルのモリス評価が当時のイギリスにおけるモリス解釈の主流となっていたことを考えあわせると，堺のモリス評価は本国イギリスをある意味では先取りするものであったと考えられる。

以上のような意味で堺利彦というモリス紹介者を得たことは，日本におけるモリス評価の歴史において極めて幸運なことであった。村井知至や堺利彦が偏見を交えずモリスの社会主義思想を正しく評価し，またその独自性を認めたことは，日本におけるモリス評価の歴史をスタートにおいて正しい方向に導きえたのである。

註

1　明治期の社会主義に関しては，石田雄「明治政治思想史研究」（東京，未来社，昭和29年），大河内一男『幸徳秋水と片山潜—明治の社会主義』（東京，講談社，昭和47年），松沢弘陽「日本社会主義の思想」（東京，筑摩書房，昭和48年）等を参照した。

2　柳田泉　「明治に於る社会主義文学の勃興と展開」『明治社会主義文学集(一)』（東京，筑摩書房，昭和40年），p. 460 参照。

3 「社会民主党」創設に関しては遠藤欣之助『日本の民主社会主義のルーツ』（東京，新有堂，昭和57年）を参照した。

4 大杉栄 『自叙伝』（東京，改造社，昭和23年），p. 157.

5 「萬朝報に若し光明ありとせバ内村幸徳堺三君の如きハ其の中心なり，今や三君，対露問題の国是論に於て、社中と意見の合せざる所あるが為に，時を同くして朝報社を去る，吾等悲まざるを欲するも得んや」黒岩涙香「内村，幸徳．堺，三君の退社に就て」，『黒岩涙香集』（明治文学全集47）（東京，筑摩書房，昭和46年）pp. 374-375.

6 明治36年に堺が創刊した雑誌。婦人の意識向上を目的としたもの。

7 Henry Mayers Hyndman (1842-1921) はイギリスの社会主義者。1881年モリス等と共に「民主連盟」を結成する。84年革命主義を主張したモリスと決裂し，「民主連盟」を「社会民主連盟」と改称する。1900年フェビアン協会，独立労働党などと共に労働党を結成したが翌年脱退した。16年国家社会党を組織して戦争支持の態度をとった。

8 堺利彦 『明治社会主義文学集(一)』（東京、筑摩書房，昭和40年），pp. 439-455.

9 平福百穂（1877-1933）は近代の写実派の日本画家。絵画における自然主義的潮流の発展を図るかたわら『平民新聞』にこま絵をかいた。

10 村井知至の『社会主義』におけるモリス評価については拙論「明治期日本における William Morris」，*Asphodel*, 13（同志社女子大学英文学会，昭和55年）pp. 102-106 にくわしく述べた。

11 週刊『平民新聞』及び『改造』誌所収の「芸術的社会主義者キリアム・モリス」は国立国会図書館（東京）で原本を参照した。

12 堺利彦 週刊『平民新聞』第4号（東京，平民社，明治36年）。

13 マルクス，エンゲルスは Robert Owen (1771-1858) をサン・シモン，フーリエと共に空想的社会主義者と規定した。

14 May Morris, *William Morris: Artist, Writer, Socialist* (New York: Russell & Russell, 1966), I, p. 292.

15 堺利彦 週刊『平民新聞』第8号（東京，平民社，明治37年）に掲載の「理想郷」の「はしがき」

16 William Morris, *The Collected Works of William Morris*, ed. May Morris (New York: Russell & Russell, 1966), XVI, p. 91.

17 *Looking Backward 2000-1887* は1888年に出版され，*News from Nowhere* は1890年に *Commonweal* に連載され，翌1891年に刊行されたのであるから，出版年度に関しては堺の誤記である。

18 May Morris, *William Morris: Artist, Writer, Socialist* (New York: Russell &

Russell, 1966), II, pp. 501–507.

19 モリスの産業主義批判，商業主義批判に関しては講演 'Art under Plutocracy' (1883) や 'Art and Socialism' (1884) 等にくわしい。共に *The Collected Works of William Morris*, XXIII に収録されている。

20 モリス夫人 Jane-Burden がロセッティと恋愛関係に陥ったこと等。

21 1955年，E. P. Thompson は，社会科学者としての観点からモリスの社会主義を評価した画期的な業績 *William Morris: Romantic to Revolutionary* を世に問うたが，それ以前はモリスの社会主義を中心にすえて彼の思想全体を論じるという傾向はほとんどなかったといってよい。

Synopsis

Toshihiko Sakai's Interpretation of William Morris

Mami Yamada

William Morris (1834-96) is known as a poet, a writer, a designer, and a socialist.

He was a craftsman well versed in many fields of handicrafts, and he thought that the deplorable working conditions of those days were caused mainly by the machine-production system of the Industrial Revolution. He also thought that the deplorable working conditions made the quality of handicrafts poorer and poorer. To prevent this degeneration in the quality of handicrafts, he thought, the working conditions should be reformed.

It was mainly from John Ruskin's *The Stones of Venice*, especially its famous chapter, "The Nature of Gothic," that Morris received important hints for forming his view of art. Among those who influenced Morris in the formation of his socialist views were Robert Owen, Charles Fourier, and Karl Marx.

News from Nowhere, one of Morris's representative works, has been recognized as a milestone in the history of utopian fiction. The imaginary world presented in the book is anarchic and pastoral. Those who live in the utopian world work with pleasure and produce many beautiful daily necessities. They enjoy their life as both makers and

users of those beautiful things. They have no government, no court of justice, no forced education, and no state. Morris called himself a Marxist, but the utopia presented in *News from Nowhere* is rather anarchic.

In Japan, socialism began to gain interest among intellectuals in the thirties of Meiji Period (1897-1907). In the early Meiji Period, some types of socialism were introduced into Japan from Europe and America: Christian socialism, utopian socialism, Marxism, and so forth. It is generally acknowledged that Toshihiko Sakai (1870-1933) was one of the first socialists in Japan. His contribution to the introduction of socialism into Japan was great.

He appreciated Morris's socialism and translated *News from Nowhere*. His version of *News from Nowhere* appeared serially in a weekly newspaper, *Heimin Shinbun*, edited by some socialists including himself. He also wrote some essays on Morris's socialist views and emphasized that his socialism was fostered by his own hope and experience as a handicraftsman. The main purpose of this paper is to discuss how Sakai interpreted Morris's socialist views.

Some important points of Sakai's interpretation of Morris are as follows.

His introductory articles on Morris and his version of *News from Nowhere* appeared in 1904, eight years after Morris's death. It shows that Sakai had much interest in Morris's socialist views in the earliest days of his career as a socialist.

Morris called himself a Marxist, but the utopian world presented in *News from Nowhere* is rather anarchic than Marxian. If Sakai had been a fundamentalistic Marxist, he could not have appreciate Morris's

utopian views. Sakai, trying to interpret various socialist views, introduced Morris's utopia to Japanese socialists as one of many types of socialist utopia.

Discussing Ruskin's influence on Morris, he elucidated some unique aspects of Morris's socialist views. Morris thought, art went to the bad as a result of the corruption of a society, and if the society was reformed, art could be relieved from its corrupted state. And Morris adopted socialism as a means to reform English society.

Morris was influenced by various socialists in the formation of his socialist views. In this point, Sakai had something in common with Morris. Though they called themselves a Marxist, their way of thinking was not limited to a narrow sphere of socialist sectarianism, but was a broad-minded one. It was perhaps because both were men of letters as well as practical socialists.

Sakai enumerated some books about Morris in the beginning of his article, 'William Morris as an Aesthetic Scoialist,' which appeared in the *Kaizo* in 1920. But in those books on Morris cited by Sakai, Morris is not treated properly as a socialist. This shows that Morris's aspect as a socialist was not appraised highly in those days even in England. Therefore, it can be said Sakai's interpretation of the achievements of Socialist Morris is very important not only as one which introduced Morris's socialist views into Japan but as one which marked a milestone in the history of the interpretation of Morris as a socialist.